

サクラエビ研究のパイオニア、中澤毅一（その1）

久保田 正

駿河湾のサクラエビ漁業の始まりは、二人の漁師がアジ網を何時もより深く入れたことにより、明治27（1894）年12月（旧暦）に偶然に発見されました。それ以来サクラエビは当湾の沿岸漁業の重要な水産物の一つとして知られています（図1）。



図1. サクラエビ、*Sergia lucens* (Hansen)
富士川河川敷での乾燥風景（2017年5月）

（撮影 小泉武生）



図2. サクラエビ研究の
パイオニア、中澤毅一
（1883～1940）

その後、昭和元（1925）年秋漁から極端な不漁に陥り、その不漁の原因

を解明するために、当時の庵原水産組合からの調査依頼を受けたのは、水産講習所（現・東京海洋大学）に勤務し、甲殻類を専門としていた中澤毅一でした（図2）。

毅一の大学在学中から逝去するまでの約30年間の生涯における業績は、専門の甲殻類以外の分野を含めた論文数が共著を含め110編以上になります。特にサクラエビを扱った論文は、大正3～5（1914～16）年に7編以上を学術雑誌に発表しています。この期間は、水産講習所の勤務のかたわら本種の研究を行っていました。氏の30歳前後の頃で息子3人の家族も増えて、充実した日々を過ごし、安心して研究ができた頃と思われる。

その後、昭和初期までは東京の第一高等学校の講師や「科学知識」の雑誌の編集主任などの仕事をしていました。この頃上記で述べたように地元の漁業関係者の依頼により不漁の原因を探ることを依頼されていました。彼は、このサクラエビの調査は、一年間だけでは出来ないので長期の調査を行う必要から研究所の開設（昭和3（1928）年3月）に踏み切ったとされています。

毅一は、当時の山梨県加納岩村（現・山梨市下神内川）から静岡県蒲原町字中村（現・静岡県静岡市清水区蒲原中）の海岸

近くに私費で洋風の「駿河湾水産生物研究所（Surugawan Marine Biological Laboratory）」を設けてサクラエビの生物学的研究や不漁の原因などを探ること、さらに深海魚類の収集に務めた人物です。この研究所における活動は、昭和10（1935）年頃まで続けられましたが、当時のサクラエビの研究を日本で最初に手掛け、多くの業績を遺したことは高く評価されます。

当時、研究所における単身の食生活は質素でしたが、後に家族も一緒に生活して安定した状態となり、著作に力を注ぎ、この期間には著書5点そして共著の図鑑3点（甲殻類）を完成させています。

また、研究所開設前の昭和2年12月には、水揚げが激減したので静岡県水産試験場は「富士丸」により湾内の11地点で海洋観測（0～400m迄の間6層）を行ない、毅一も乗船しました。この結果は、地元で報告会を行ないその報告書は、昭和3（1928）年に出されました。

彼は、サクラエビを愛し、それを守るために力を注ぎ地元の漁業関係者をはじめ地場産業に大きな貢献をしました。この業績およびその背景について、現役のサクラエビ漁業従事者や関係者には是非知って欲しいことです。